



ネットワーク情報 学部・佐竹弘靖教授 (文化人類学・スポーツ人類学・民俗学) のゼミ生6人は、2月17日から26日までユーラシア大陸の中央に位置するウズベキスタンを訪問、タシケント国立東洋学大学で日本語を学ぶ学生たちとお互いの国や大学を紹介し合い、交流を深めた。一行はタシケントのほかフハラ、シャフリサプス、サマルカンドなどを訪ね、シルクロードの中継地として栄華を誇ったウズベキスタンの歴史や文化に触れた。参加した2学生の体験記を紹介する。



佐竹・教養ゼミ ウズベキスタン訪問

日本語学科学生と交流

難波 めぐみ (文3)

ウズベキスタンのフィジカの駆け引きの末、値引カードの出発点はきに成功しました。この首都タシケントです。ここに、車や新築の建物こは、主要な公共施設のが多くなくても、姿を多変多しい新市街と、モスクやえた「絹の道」があるこバザールなど歴史的な面とを実感しました。が残る旧市街とに分かれ タシケントの次は列車に乗ってフハラへ移動します。歴代の王が住んで段交渉に挑戦し、15分ほいたアルク城、カラーン



▲ 12年前、サマルカンド外国語大学に佐竹ゼミ生が建てた石碑の前で右から2人目・田中さん、中央・佐竹教授の左が難波さん

田中 美有紀 (文3)

「将来の夢は日本で働 月19、20の両日、タシケント」と語る学生、日ント国立東洋学大学日本人を見つけて「コンニ語学科の学生たちと交流チハ！」と笑いかける現 しました。地の人々。遠いウズベキスタンの地で日本がこ生7人がタシケント市内んなに愛されていることを案内してくれました。を肌で感じたことが、今カファリ・シャリシ廟な回のフィールドワークでどの観光名所だけではない、現地の人気の食堂で昼食をいただいたり地下私たちが佐竹ゼミは、2 鉄に乗ったりとウズベキ

バザールで`値段交渉、

寄稿

学生たちで伝統料理囲む



・ミナレットに代表されたようなこの街の呼吸がするように色彩による派手聞こえてきます。さはありませんが、しば 古い民家が立ち並ぶならく過ぐすと、息を潜めか、早朝には、子どもが

▶ 地元の人々にぎわうチョルスバザール (タシケント)

◀ 東洋学大学の学生と二緒にプロパーティー (タシケント)



スタン人の生活に触れる 同大学を訪問しました。ことができました。 私たちは、専修大学や日二日目は、佐竹ゼミが 本の教育・建築・ものづ

近代的に姿を 変えた「絹の道」



バスで通学し、若い女性 思議な感覚を体験した街 ことから、「青の都」の出動する生活の様子を として名高い場所です。「マダム！ マダム 見ることが出来ます。 旅の後半に訪れたのは 特にならなレギスタン みることで出来ます。 まるで、放置された砂 サマルカンドです。シャ 広場のウルグ・ベク・メ 時計がひっくりかえされーヒズィンタ廟群やビビ ドレセの中は、広い庭を 1トします。自分の使え たように、目の前で時間 ハニム・モスクなど、青ぐるりと囲むように土産 英語で必死に金額や条 件を提示し、ストールを 三分の二の値段で買うこ とができました。

よく「言葉の壁は越えられる」と聞きますが、言葉が通じれば、買い物も道を尋ねることもより楽にできます。互いに使用できる言語の存在が、人や物、情報をつなぎ、現在もシルクロードに繁栄をもたらしているのです。 母語を大切にしつつ、外国語習得にも力を注ぐことが、日本の未来を照らす光となるのではないのでしょうか。

日本への関心の 高さに驚く

でなく、街にいる一般の方々も親日的でした。言葉がわからなくても撮影を求められ、有名人にもなったかのような気分でした。「日本のことが好きなんだ」と語ってくれる人もいました。遠い異国の地で日本がこんなに愛されているのは、日本人として非常に誇らしうらしいことです。

くり・流行・食について 囲んで双方の学生たち30 ないはずなのに、学生た のプレゼンテーションを 人ほどで歓談しました。 ちの日本語は本当に流 行い、タシケント国立東 会の終盤は「じゃんけん 暢でした。彼らは日本に 洋学大学の学生たちから 大会」になりました。賞 強い関心を持っていて、 は日本語で同大学やウズ 品は和柄のペンケースや 私たち日本人よりも日本 べキスタンのお祭り・ク ポーチなどの日本からの のことを愛しているの でラッシュ(伝統競技)・フ おみやげ。部屋が熱気は はないかと思わせるほど ロフ(伝統料理)につい 熱くなるほど白熱した戦 でした。日本で働きたい て発表が行われました。 いが繰り広げられまし と目を輝かせる学生の多 その夜、プロフと日本 た。 かったのが印象的です。 のみそ汁や汁粉、菓子を 学習を始めてそう長く 交流した学生たちだけ ます。